



万葉集と「とことめの里」

一志町には、地元をはじめ周辺住民に親しまれる一志温泉やすらぎの湯がある。温泉は、福祉を中心とし



た「とことめの里一志」の中にあるが、この「とことめ」という名前は、万葉集に詠まれた波多横山^{はたのよこやま}に由来しているのをご存知だろうか。

波多横山とは、古代日本を二分した争い「壬申の乱」によって、運命が大きく変わってしまった人物が、その景色に心いやされたという山のことである。場所は、一志町の八太や井関、大仰、波瀬の4つの候補地が知られているが、どこも確証はなく謎とされている。

人物の名は十市皇女^{とおちのひめみこ}、父は天武天皇^{あまのあまのうじ}（大海人皇子^{ぬかたのおおきみ}）、母は額田王^{ぬかたの}で、大友皇子のきさきに当たる。壬申の乱は、皇女にとって父方と夫方の争いでもあった。1カ月余りの激戦を経て、父方の勝利に終わり、夫が亡くなった後、皇女は伊勢へ出掛ける。道中、波多横山の美しい山河の美を眺め、「河上の湯都磐むらに草むさず常にもがもなとこおとめにて」と付き添いの官女が、皇女を



一志温泉

励ますために詠んだとされ、その意味は、川のほとりの神聖な岩むらには草が生えないように、皇女にはいつまでも若く美しい永遠の乙女でいてほしいという気持ちを詠んだものだといわれている。

今から約1,300年以上前、一志町周辺には、豊かな自然に満ちあふれた景観が至るところに広がり、都人をいやしていた。

そんな思いを巡らせながら「とことめの里一志」を訪ねてみてはいかがだろうか。

（「広報津」平成19年3月1日号）